

地域密着型サービス外部評価結果報告書

社会福祉法人 福井県社会福祉協議会が実施した下記の事業所の外部評価の結果をご報告します。
この報告を貴事業所におけるサービスの質の向上に向けた取り組みの一助としてご活用いただき、地域における認知症等高齢者の生活・介護等の拠点として一層ご活躍されることをご期待申し上げます。
また、本報告書は、以下のような場面などでご活用ください。

- ・利用申込者またはその家族に対する重要事項等の説明
- ・事業所内の見やすい所への設置または掲示
- ・運営推進会議など関係者への説明

法 人 名	社会福祉法人 ふくいの福祉家
代 表 者 名	理事長 西野 幸治
事 業 所 名	グループホーム幸
評 価 確 定 日	2021/8/25

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1890200098		
法人名	社会福祉法人 ふくいの福祉家		
事業所名	グループホーム幸		
所在地	敦賀市鑄物師町1904-1		
自己評価作成日	令和 3年 7月 11日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/18/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 福井県社会福祉協議会		
所在地	福井県福井市光陽2丁目3番22号		
訪問調査日	令和3年 7月 30日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

<ul style="list-style-type: none"> ・入居者のこれまでの暮らしを大切にし家族や地域の方との関係を継続できるよう支援している。 ・「ぼちぼちや」というアイスと手作り小物のお店を事業所の一角で行っている。入居者と職員の地域の人との交流の場になっている。 ・慣れ親しんだ環境の中、穏やかな最後を迎えていただけるよう、職員は看取り研修やターミナルケアの話し合いを重ね、多職種と連携を図り看取りケアに取り組んでいる。 ・職員は提案や疑問、相談などの意見があれば「目安箱」を利用している。職員の意見は運営側まで届き必ず返答され職員会議で共有される。 ・研修や資格取得、更新などスキルアップの内容により法人の費用負担がある。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

<p>事業所は周囲の住宅と同様の建物で、住宅街にあり、松原海岸や敦賀高校が近くにある。事業所から徒歩5分程のところに、「幸在宅センターmint」を2020年10月14日に新築移転し、喫茶・食堂を併設したことは、地域も含め、コロナ禍において利用出来なかった喫茶や食堂の活用に役立っている。法人理念の「愛着心」と、具体化する「選択のある暮らし」を目指し、職員各自が「個人目標と計画」を作成している。また、事業所独自の「ケア照会状」を作成し、職員は利用者の思いやその人らしい暮らしを共有しながら支援している。外出の機会を多く設け、運営推進会議を利用し、地域と積極的に交流を図り、より良い関係性を築いている。更に、職員用目安箱の活用、事業所の活性化、職員の意見反映への取組みを推進し、地域福祉の活動拠点として、家族や地域からの信頼が深まっている。</p>

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業理念、事業方針について研修時、個別面談で確認し共有できている。新人職員に実践で指導する際、職員にはOJT担当になってもらい振り返る場となっており日々のケアでも実践できている。	法人理念、ホーム運営理念と基本方針を一覧表にし、毎月開催する職員会議において唱和し、利用者の意向と選択ある暮らしの実践に努めている。毎年、職員の個人目標を設定し、年2回の管理者面談で検討し、内容は全職員が共有して実践に活かしている。	法人理念、ホーム運営理念と基本方針を新しいパンフレットに記載しているが、一般の人が理解しやすいように、「法人理念」、「ホーム運営理念」、「基本方針」と明記することが望まれる。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	小学校の見守り隊に参加。ぼちぼちやでアイスクリーム、手づくり小物を販売。クリーン作戦とし月に一度、周辺の清掃を行う。など地域に向けて活動している他、日々の散歩など顔見知りの関係になっている。	施設開放のクラブ活動教室、事業所祭り「幸フェス」、介護講習会はコロナ禍で行っていないが、「小学校児童見守り隊」に参加したり、サロンや事業所運営の購買所「ぼちぼちや」を利用する保育園・小中高校生と交流したり、地区の防災運営安全や清掃などに参加し、積極的に交流している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	日々の活動を内にこもる事なく地域との積極的な交流から実践的に認知症の理解、支援に繋がっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームの取り組みをホームページのブログから紹介し、今後の予定、利用者の状況、事故報告など情報共有している。地域の話し合いもしている。他GHの管理者との交流を図り会議に参加してもらっている。	奇数月に家族、市職員、法人訪問看護師、民生委員、区長、住民、理事長、管理者が参加し開催している。運営状況、苦情、ヒヤリハット、行事、意見、要望、地域情報について協議し、研修報告を行っている。全家族に会議報告書を送付している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議の出席、敦賀市や事業者連絡会等で情報共有している。また理事長は敦賀市の委員会や成年後見人等で包括との連携も行っている。	必要に応じて職員が市に訪問し、市職員が運営推進会議に出席している。理事長が県・市の事業所連絡会、グループホーム協会の役職にあるため、随時情報交換・連携を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	玄関のセンサーはつけているが鍵は常時開いている。身体拘束については、ケースによって会議を開くことになっているが、今まで開いたことはない。	「身体拘束防止マニュアル指針」を整備し、3か月毎に「身体拘束廃止委員会」を開催し、毎月「職員会議」で研修・協議を行っている。特に「利用者の思いを尊重するケア」を目指し、虐待・拘束を防ぐ注意・喚起を行っている。外部研修や内部研修を毎月開催し、日中は玄関を施錠せず、身体拘束をしないケアに努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	入職時研修にて虐待防止について研修を行う。ケアについては、ケア会議、職員会議を通して疑問を残さないようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社会福祉士事務所を併設し、理事長は成年後見人を受任している。資格を所有している職員にも活動を促し支援している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入所前からの見学や、契約前、契約時の説明を十分に行い家族の不安や疑問点等をさいて十分に納得、理解したうえで入居してもらえよう努力している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族訪問時や担当者会議、電話等の家族から得た情報を記録に記載。日頃からの伝達やミーティングにて家族の思いが伝わるよう情報の共有に努めている。家族様アンケートを実施し、運営に反映させている。	家族・利用者から日常的に意見・要望を聞き取り、職員会議、運営推進会議で共有している。以前は「意見箱」を設置していたが、現在は設置していない。年度当初に「家族へのアンケート調査」を実施し、ケアプラン作成時の聞き取りと共に、運営へ反映している。集計結果は公表している。	家族の意見を集約するために、以前は「意見箱」を設置していた。職員と日常的に交流し、意見が減少していたとはいえ、書く場があれば意見を言えると考える家族の立場を汲んで、再度意見箱の設置が望まれる。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	会議やミーティングの際に職員一人ひとりの意見を引き出せるように「目安箱」を設置し配慮している。より多くのスタッフの意見が抽出できるよう努めている。	人事考課は導入していないが、月1回の職員会議において、職員用に設置している「目安箱」を集計し、話し合っている。目安箱からの意見・提案件数は増加傾向にあり、運営会議や全体会議でも協議している。職員は年2回、理事長・管理者と個別面談をしている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	心身の負担軽減の為、夜勤時間の短縮や職員配置の増員、時間差勤務による残業の軽減を行っている。休憩時間も現場を離れてとれるよう工夫している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	行事や係りをケアマネを中心としたグループ制にしており、部屋担当もケアマネとペアになるようにしている。年に数回内外の研修を行っている。福祉人材育成のための職場研修にも参加している。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	理事長はGH協会の役員を務めている。地域の福祉の会にも参画し、情報交換やネットワークづくりに励んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	早くホームに馴染めるように、声かけを意識的に増やし関係をつくる。他の入居者様とも早くなじめるように橋渡し役を行う。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	センター方式のアセスメントを一緒に行ってもらうことで家族の意向をケアに取り入れる姿勢を示している。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	契約時に、ホーム利用に対する疑問に全て答えるようにしている。特に退所の事項については、明確に説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護する側、介護される側の区分を極力なくすことを方針に掲げ、人と人との関係性の上にケアが成り立っていることを確認しあっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	センター方式のアセスメントを一緒に行い、担当者会議では問題点、ケアの方針の共有を行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	自宅や家族の家、地域の交流場所にてかいたり、なじみの床屋を利用するなど支援に努めている。	家族・利用者から得た情報を、「センター方式」で暫定的に記入し、その後得た情報と共に台帳にまとめている。公民館のサロン、介護予防講座、事業所の幸フェスは、コロナ禍で取り止めている。地域の病院、商店との交流外出や外食は、家族の協力を得て行っている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員が状況を観察し、支援が必要な時には中に入り、一人ひとりの入居者に対し声かけや傾聴、仲裁などを行っている。関係性によっては、机、ソファの配置なども意識している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退去した後も家族に呼んでいただき他の入居者とドライブに出掛けたりし築いた関係性を大切にしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	アセスメントにて一人ひとりの思いやそれまでの暮らしを事前に調査している。入居後も自分史を作成する、家族との会話、普段の会話等から思いを把握する工夫をしている。	利用者の思いや意向を、事業所独特の様式である「ケア照会状」を利用・作成し、全職員が共有して希望や意向の把握に努めている。入居後の「自分史」作成も徐々に行っており、家族、利用者の思いを着実にまとめられるような取組みを行っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントにて一人ひとりの生活歴やそれまでの暮らしサービス利用の経過等を家族、関係機関から情報収集している。入居後も自分史を作成する、家族との会話、普段の会話等から思いを把握する工夫をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	センター方式を活用しながら、職員全員からの意見を収集し、ケア会議を開き、それらの情報をもとにケアマネがアセスメント、プランニングを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	家族の意見、職員全員の意見を収集し、それらの情報をもとにケアマネがアセスメント、プランニングを行っている。	利用者と家族の意見をまとめた「ケア照会状」を作成し、ケアマネジャーのプラン作成に活かしている。全利用者1日の介護計画、実施記録を1頁にまとめ、1か月毎のモニタリング、6か月毎のケアプラン作成に応じたケア会議を開催し、チームで作るケアプランに反映している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケア会議への職員全員の意見収集、担当職員と一緒にモニタリングを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族からの依頼は少ないが、依頼があればできる限り支援している。入居者の希望については、家族の承諾を得てから実現できるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	保育園との交流や小学校の見守り隊、ふれあいサロン、地区の祭り、近隣の手芸料理教室に参加、地区でのクリーン作戦として地区の掃除、幸フェスを開催して地域での役割を持てるように支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医は定めているが、希望の医療機関を受診している。	利用者や家族の要望を優先し、かかりつけ医または協力医を受診している。原則的には家族が同行するが、職員同行の場合は、受診後に電話で家族へ内容を報告する。かかりつけ医、協力医との関係を保ち、往診が可能で、看取りに繋げている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週2回の訪問看護師訪問時、利用者1人ひとりの状態を報告し支持を仰いでいる。異常が見られたときは、日中夜間を問わず訪問看護師に連絡し支持を仰いでいる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は医療と介護の連携シートを提出し情報交換している。また入院中の状況、経過の把握に努め、退院時はサマリの依頼、協力医への診療情報提供に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に家族と話し合いを行っている。入居者の状態に合わせ緊急時の対応も含め話し合っている。ターミナル期には、家族、訪問看護師と十分に話し合いを行い、職員会議を開きケアの統一、緊急時の対応について確認する。	胃ろうになるとグループホームには入居できないため、重度化や終末期の対応マニュアルを整備し、入居時に本人や家族の意向確認及び協議を行っている。重度化や終末期対応の研修を行い、関係者と緊急時における体制を整えている。看取りには家族から同意書を徴取している。今年は2名の看取りを行った。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	緊急時に備えてまずやらなければいけないこと、連絡先や初期手当てなどが落ち着いて迅速に対応できるように、わかりやすいパネルを作っている。また管理者は24時間オンコール体制をとっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時を予想して避難訓練を定期的に行い、地区の方にも参加を呼びかけている。原子力災害や風水害の対応についても職員会議で話し合っている。	火災と風水害に対するマニュアル、緊急連絡網を作成し、日中・夜間想定避難訓練を実施している。地区に自警団がないため、運営推進会議において地域住民との協力体制の構築について話し合っている。水・備品・非常食は3日分備蓄している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	子ども扱いしない言葉かけをはじめ、呼び方も職員会議で話し合い統一している。また個室、トイレ、浴室にはすべて鍵がかかるようになっている。	利用者の状態や希望や尊重した生活支援を基本にしており、「プライバシー」や「尊厳」に関して、新人および全職員に定期的に研修を行っている。新人職員には、10日間の勤務表作成を義務付けている。個人情報事務所、2階会議室などの鍵がかかる場所に保管している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日頃の何気ない会話の中で入居者とコミュニケーションを図り、入居者の思いや希望がどんどん出てくるような関係性の構築を行い、自己決定できるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	業務表には時間の記載がなく、入居者の状況に合わせ業務を行えるようにし、入居者のペースに合わせた支援ができるよう心がけている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時の身だしなみはケアプランに取り入れて行っている。外出時は特に注意を払うようにしている。洋服や小物類も本人と一緒に選び購入するときもある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	誕生日には、個人の希望に沿って食事会や外食を行い、その他にも定期的に外食を実施している。日常の食事づくりは台所に入ってもらったり、盛り付けを毎日一緒にしていただいている。また希望食の日を設けて、食事に携わる機会を増やしている。	業者から届く食材の調理、配膳、片付けを利用者が手伝っている。毎週水曜日の夜は、口頭嗜好調査で得た希望食をホームで作っている。月1回の外食、誕生会などの行事食、おやつも月数回作っている。メニュー表は、利用者の手書きを掲示し、食前に口腔体操を行う。箸、茶碗、湯呑は好みの物を利用している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量、水分量を記録し、摂取量を把握している。嗜好品や個人によって摂取できないものも把握し、個人にあった食事量、栄養バランス、水分量、食事形態を確保できるように支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	月2回歯科医師による指導を受け、一人ひとりの状況に合わせた声かけ、誘導、介助など食後の口腔ケアをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄記録をもとに排泄パターンを把握し、一人ひとりに合った排泄のやり方で支援している。必要以上の排泄用具は使用しない。現在オムツを使用している入居者はいない。	月毎の排泄パターンを正確に把握し、職員が共有している。昼夜には、「リハビリパンツ」の利用を基本とし、ベッドにナースコールは付いていないが、それぞれの状況に合わせて排泄支援をしている。夜間時居室ポータブルを1名が、離床センサーを1名が利用している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	本人からの訴え、排泄パターンの把握により、医師と連携して下剤の調整を行っている。。普段から適切な食事、水分摂取を促し適度な運動が行えるように支援している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	毎日午後から入浴の時間をとることで、できる限り柔軟に一人ひとりの希望に添えるように支援している。毎月第二週目は入浴剤を入れ「温泉の日」とし楽しんでいただいている。	利用者状況に応じるため、毎日湯を沸かしているが、利用者は週に2～3回昼から夕方に個浴槽で入浴している。リフトはないがチェア入浴が可能で、入浴担当者が着替え準備から退出までを担当し、爪切りや水分補給はホール職員が対応している。月1回、温泉浴(入浴剤)を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中の活動を心がけ夜間は睡眠できるように支援している。日中でも眠気が強い時は状況を見て居室で休んでもらう。起床時間、就寝時間は、日中の状況も加味して一律ではなく一人ひとりの状況に合った声かけをしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診記録、薬情を整理してファイリングし、常時確認できるようにしている。基本的には完全に薬を管理し投薬が確実になされ、服薬確認ができるように支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	定期的に職員間で役割を分担し、入居者が活躍できる行事の企画を立てている。生活歴を把握し出来ることを見極め、暮らしの中で活躍できるよう支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	散歩やドライブ、買い物、個別外出など戸外活動に加え、見守り隊の参加を常に意識している。入居者から希望があれば人員配置を工夫しドライブなどにもかけている。	コロナ禍の影響で、地域行事、旅行、小グループ外出、外食などが極端に少なくなっているが、小学校児童見守り隊や戸外個別活動、買い物、散歩を中心に実施している。日常的には職員が対応するが、家族の協力を得ることもある。特に、ドライブには人員配置を工夫し取り組んでいる。事業所運営の購買所「ぼちぼちや」は地域に浸透しており交流を深めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	原則的に個人のお金は所有していません。買い物は立替にて金銭管理しています。希望によりお金を持つことを希望される方は、その都度使えるように金銭管理しています。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の希望があるときはかけて頂いているが、話の内容や個人の状況により判断している。遠方にある家族には定期的に絵葉書を送るよう支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室やトイレが直接見えないよう、のれんでの目隠ししている。また冬場にはトイレに暖房をし寒暖差を解消している。ホールでは利用者と一緒に作成した飾り、季節の花や観葉植物を置くなどしている。デッキには季節の野菜など配置している。	共有空間は、中庭テラスの広い出入口から光が明るく差し込み、空調設備も整いゆっくりとした時間が流れている。玄関、ホールなどには、「本物志向」という作品が展示され、利用者の気持ちが安らぎ、安心感が深まる環境となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールの中でもテーブルとソファースペースを区別し、選択して頂いている。テーブル、ソファを配置換えし気分転換も図っている。居室で過ごしたりホールで過ごしたり自由に行き来していただいている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅の物を持ち込んでもらうように依頼するが、新しい物を用意してくる方が多い。レイアウトは自由にできるように作られている。	居室の家具類や飾り付けなどは、利用者や家族の思いを取り入れたものとなっている。トイレや洗面所がないことが、居室としての落ち着いた、居心地の良さを作っており、心が落ち着く空間である。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	同線の確保はできている。ホーム内では全てバリアフリーとなっており、手すりは廊下、トイレ、浴室に設置している。ホーム内は安全に移動できる工夫をしている。		